

第13景

野田の今昔

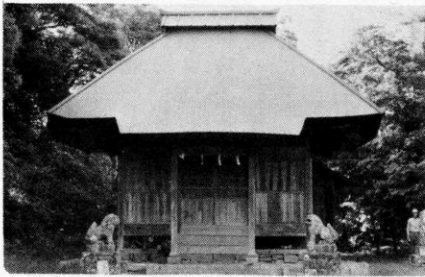
道近堤のほとりに立ちて

なしていた、土地の古老阿波英次翁(明治)の話によると、鍛冶屋、宿屋、散髪屋、呉服屋、佛壇屋、菓子屋、染物屋、医者、飲食店、魚屋等それぞれ一軒あり十数軒が軒を並べ、日置北陸地区の文化交通経済の中心地として、また往還の客で賑わっていたと……年移り明治の末期から大正を境にして野田地区百十餘戸の戸数は漸次に減少をはじめ現在では南北野田を合せて五十戸足らずの過疎化地帯となり、遂に野田校廃校が事実となっている。併し道近堤に影を映す四圍の自然は昔と変わりなく美しく現在そのほとりの十字

の森——美しい野田創世記
永祿の頃(西百余年)徳山「湯野田」という所の郷土某がこの辺にきて遊蹟をしていた時、猪を射損じて自分の犬を射殺してしまった。某は愛犬の亡骸を手厚く葬り大石を置いて塚とし背負っている矢を立てて印とし以後弓矢の業をふつたりやめて山を開き農業を起した其の標の箭竹は不思議にも芽をふき繁茂したので、この地を「野田」と称し「矢竹の遺跡」は大切に語りつがれてきた。そしてこの伝承には「万一この森が荒廃する時は村は衰微するかも知れない」という予言的なものが附加されて

新版 日置十八景

先大津の旧中板地古市から炭床野田を経て、津黄、立石港を結ぶ道路は峠越えの難路であつたらうが藩制時代から秋へ通ずる往還で十里十六丁あつたとある。



日吉神社

この路線の中継地野田の四つ辻は五軒町の別名をもった小店街を

路は東西南北に舗装が進み快適となり人や車の往き来は漸次増してきたが昔の五軒町は今は一軒町、創業二〇年余の尾方店の外商店はなく、数戸の家並も戸を閉じ、往時の店の所在を問うも記憶を呼び起す者は少なく今昔の感を深うする。

風土注進案を繙くと野田村は阿川毛利の管轄地として内藤又七様の御領分と誌され、野田御蔵に收納された給領米は二六六石九斗六升八合とある。

次にこの地の史跡文化財を点描する

(其の一) 野田地名の由来と矢竹

いたらしい。最近土地の異常開発が進められ遺跡はいつとなく破壊され所在も詳かではないとか、また語り草も風化して迷信的に取扱われていると聞いている。野田地区開拓の物語りが美しく表現されていると筆者は考察するのであるがそれにつけてもこの美しい創世記をそのまま消滅させることがあってはならないと深く感ずる次第である。

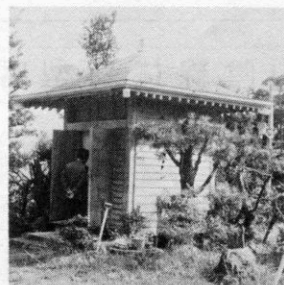
(其の二) 野田小学校跡
明治の学制により明治八年児玉家の家塾を昇格して野田小学校と改称され、以来九十余年の栄光の歴史を重ねていたが昭和四十二年廢校となり日置小学校に統合された現在「老人恩の家」の標札を掲げ更生されているがこの地域の人々の追憶はさまざま感慨も亦はかり知れない。筆者は統合時日置小学校の校長として当時を回想して亦感慨無量である。小学校の廃止はその地域の衰微に拍車をかけることは東西を問わず実証されている。然し新生日置小学校の創設に校区の方々の理解と協力のあつたことは今尚忘れられないところである。旧校門近くに日置村長上田与助氏の刻銘ある「野田小学校跡」という石碑が世の栄枯盛衰を語る如く建立されている。これは野田地区の昭和史の重要記事として後世に語り継がれることであろう

(其の三) 日吉神社社
見事な社殿と神々しい神域をもち乍ら廢社となり野犬の住処と化していることは時の流れとは云え惜しまれてならない。県内では日吉社は二十一社ありその由緒は近江国山王権現日吉神社を延歴年間に勧請されたといふものが多いので当社も同系統かと推察されその由来は古い、祭神は「大山咋命」といわれ治山治水の神であるから野田地区の産土神として崇敬を集め十一月下旬の祭例日には地区総祭りとして芝居や露店が並び賑わつたものらしい。今、日吉大明神の懸額ある鳥居を潜り、しんとした境内を一巡すると数々の奉寄進の遺物がある。石造物に刻まれた年号に「寛保」「万延」がはつきりと読みとられ本地区の盛衰の貴重

な記録である、刻銘の一つに
御願
国家安全
風雨順次
五穀豊饒
村民快樂

(其の四) 永照院經堂(省記)
註「ふる里日置史探訪」乞参照
(その他) 野田大師講、楽踊り
豊前坊などの民俗行事は今は全くすたれ資料記録も無いらしい
六月の或る日、取材のため此地を久し振りに訪れた。山野の新緑は鮮やかにして棚田の水稲もよく活着き生育の最中、時々きこえる山鳥の声、道端に或は合壁に囲まれ点在する純農家の風景を眺めながら眼下に広がる日置平野を愛でて山を降った。この路線の改修全通の暁には当地区は再び脚光を浴びるのであらう、歴史は繰り返すと云われる日も遠くはあるまい。
羽仁記

○日吉宮訪う人もなく梅雨に濡れ
○道近の闇の深きに螢飛ぶ
※道近はどうきん堤
白石敏江



永照院經堂